

# 地域活性化と情報活用

## Using Information in Community Building

研究代表

根 本 忠 明

Tadaaki Nemoto

所 管：情報科学研究所

研究期間：平成25年度

研究代表者：根本 忠明（本学教授）

研究分担者：服部 伊人（本学教授）、刑部 芳則（本学助教）、  
羽根 秀也（本学非常勤講師）、木村 昌史（本学非常勤講師）

### 研究の目的・概要

我が国は長引く経済不況と人口減少により、日本各地の地域経済は低迷し、地域崩壊ともいえる酷い状況に追い込まれる所も出てきている。かつての高度成長時代にとられた企業誘致のような地域経済を活性化する方法は望めず、新しい地域活性化の方策が、全国各地で様々な方法で模索・試行されてきている。

たとえば、大学誘致による学生の確保、新しい町づくり（商店街ほか）による住民の確保、新しい特産品の開発による産業振興、世界遺産の指定獲得などによる国内や海外からの観光客の誘致などなど。

日本の各地域は、歴史的な伝統・文化と地域独自の自然・社会・経済資産を有している。そして、現在、全国の各地域は、それぞれ個別の課題に直面している。これらの実情をふまえての地域活性化の方策を検討する必要がある。

本研究は、この新しい地域活性化の試みに、自治体・組織体・住民・短期滞在者との間でのコミュニケーションの方策と情報技術の利用が、どのように貢献できるかについて、海外も含めて多角的に調査・分析しようとするものである。

このために、異なる専門分野の研究者を集めての共同研究を目指している。共同研究者として歴史学、観光社会学、マルチメディア、通信ネットワーク、ソーシャル・ネットワークなどの専門家を軸に、自治体関係者や地元経営者や地元住民などの参加を得て、共同研究をすすめることとする。

本研究では、まず、江戸・明治の時代をへて現在までの地域活性化の歴史について情報収集すると共に、過去の成功例と課題について、検討することとする。長い歴史の上での地域活性化の知恵について学ぶことを重視する。さらに、従来のマスコミュニケーションや口コミなどの他に、最新の情報通信技術を利用した情報活用と新しいコミュニケーション方式の可能性について、注目することとする。

新しい情報技術としては、ツイッターを始めとするSNSやクラウドコンピューティング等のコミュニケーション技術、拡張現実・デジタル・サイネージ・プロジェクション・マッピング等のマルチメディア技術、スマートフォン・タブレット・携帯パソコンなどの情報機器と、それらの組み合わせ効果について、検討しようとするものである。

そして、自治体・組織体（企業・商店・大学ほか）・地元住民・短期滞在者（学生・観光客・帰省客など）による町興しや地域活性化に、上述の情報ツールを利用したコミュニケーションの構築が、どのように役立つかについての調査・分析を目指している。

このなかで、従来の情報活用（口コミ、電話、新聞など）と新しい情報技術活用との違いについて留意することとする。たとえば、これまでのTV大河ドラマによるロケ地巡りと、最近のアニメ巡礼による萌え興しの違いと経済効果への影響内容など。これからの地域活性化に、新しいツールがどのように貢献しえるかについて知見を得ようとするものである。

## 活動経過報告

本研究では、5月から毎月一回（夏休み期間中を除く）の会合を持ち、本年度の具体的なテーマの設定と、情報収集と情報交換を中心に行ってきた。研究メンバーの研究分野が異なり互いに初対面であったので、夏休みまでは、互いの研究テーマや関心時について、すり合わせをすることに重点をおいた。その結果、現地での視察・調査をして情報収集を行い、その情報を毎月の研究報告会での報告で共有することとした。視察調査の対象の選定は、参加メンバーのこれまでの研究や関心事を重視することとした。

研究メンバーでの協議で今年度は、地域活性化では、震災、観光、アニメ、再開発を4つにすることとした。情報活用では、スマホ・タブレットの活用、プロジェクション・マッピング、デジタル・サイネージ、AR（拡張現実）、SNS・ツイッター、ナビ・システム、SNSなどの情報端末、ネット活用、マルチメディア技術などを対象に行うこととした。

観光のテーマに関しては、政府の観光立国政策に沿って、全国の市町村で、国内・海外から観光客を招く様々な試みがなされてきている。これまで、奈良市の「平城遷都1300年事業」、萩市の「まちじゅう博物館事業」について調査（アンケート、インタビューほか）を行っている。これについては、服部伊人が12月の研究報告会で調査経過を報告している。アニメのテーマに関しては、政府のクール・ジャパン推進事業や聖地巡礼を利用した地域の町おこしについて調査をした。現地を訪問し調査したのは、徳島市の「マチ★アソビ」イベント、神戸市の「アニメーション神戸」、尼崎市の「聖地巡礼・忍たま乱太郎」である。これについては、根本忠明が11月の研究報告会で、現地で収集した資料をもとに報告している。

震災のテーマに関しては、阪神淡路大震災と東日本大震災後の復興を対象とした。具体的には、神戸市新長田地区の「KOBE鉄人PROJECT」、神戸異人館地区の震災復興事業、春日部市の「ユビキタスタウン構想推進事業」での防災情報共有プロジェクトである。春日部市の防災プロジェクトでは、災害時でのスマホとタブレットを利用した市民間の情報共有の実験を試みている。前者については根本忠明、後者については木村昌と羽根秀也が10月の研究報告会で経過報告している。また、震災（法制）による女性の服装（和服から洋服）への影響については、刑部芳則が報告している。

再開発のテーマに関しては、ニューアーバニズムによるウォーターフロントで成果を上げたとされる米ワシントンDCのジョージタウン、アレキサンドリア、ボルチモアについて、実地調査を行った。ジョータウンとアレキサンドリアについては、約2週間ほどかけて観光地としての再開発の成果について調査してきた。これについては、根本忠明が11月の研究報告会で、現地で収集した資料をもとに経過報告している。このアメリカの事例については、大阪市の梅田地区の再開発について調査（計画中）の参考にする予定でいる。

学会等への研究報告としては、根本忠明が経営情報学会の秋季全国大会（10月25日）で「地域活性化とメディア効果—ロケ地めぐりから聖地巡礼まで」のタイトルで、研究報告をしている。次年度は、これら現地訪問などの調査や実験による情報をもとに、テーマと調査対象地区を絞り、調査から分析へとさらに研究をすすめることにしている。